



藝史叢句集

中村俊定文庫

文庫 18

913



乃道はよりて傳へたるをそとて何ら
其師の言を著にたりて顯るるをそのなきは
釋交歌よむわきをそとて釋交の言なき
乃人ぬる言をそとて傳へたるをそとて何ら
得るにありて其人の知るにありて釋交の言
そとて自然の言をそとて傳へたるをそとて何ら
多かるる言をそとて傳へたるをそとて何ら
左の言をそとて傳へたるをそとて何ら
多かるる言をそとて傳へたるをそとて何ら



了り勢を逐江に居たり退つ傍乃るりりりりりり
きく杖まきやき文は弟ハ此杖を重し
て及その杖を重しを重しを重しを重しを重し
ア、勢に東に東に二物、座を結ひき居るを
そをもつて東に東に二物、座を結ひき居るを
ア、村に五十、年まきり、杖を重しを重しを重し
能くを重しを重しを重しを重しを重しを重し
道ありきききききききききききききききき
りりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

殊より故よりを重しを重しを重しを重しを重し
ア、村に五十、年まきり、杖を重しを重しを重し
能くを重しを重しを重しを重しを重しを重し
道ありきききききききききききききききき
りりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

其息亦雄也 父は信のまゝく 孝子 ありき
このころ 野村集の 全ありし 序詞の 書あり
阿ふに 對し 雅文の 筆蹟を 録す 其の 中に
記し たる こと なる 様にして なる あり

明治七年四月

福岡孝行



藝史叢句集

春之部

男 禾雄編

春の 中を 歩か せし けの 日 光
さき けし きた 新し けし けし けし けし
初 春 けし けし けし けし けし けし
明 春 けし けし けし けし けし けし
お けし けし けし けし けし けし 山の家



卓下巾先ノ箱ノ袖ノ壽子
とき不との 早報にてハッ小版系

生葉葉子目ノ 替りや 古側ノ
きさしー 降 雲葉 喉きり 小松川
七種や 新まき板の 房ふり
指大替 昔正月 々 山家振
正月ノ 正月ニ 後 録り

水細く 風々 子く なるきのみふ
ま風の 割に ぬきよ 新 水板
日の 船葉 録き のゆき ありき
霧のうと ぬゆき まて 出て 録き
降より 霧の中ニ たるの雲
まきや 小梅の 寂しー とき

去々林や 藤を言の肉をう

内藤新居 秋

梅はく 陰を争うや 大房
道はく 雲よりえて 紫梅の花
とまある 日のなみ 柳
むきの子の水素 和く 柳

秋ま〜 吟

字ら比守の 雲を争う 木々

常中 初春を 争う 木々

内藤新居

常中 初春を 争う 木々

秋

常中 初春を 争う 木々
山里や 新梅 花を 争う 木々
常中 初春を 争う 木々
常中 初春を 争う 木々

芳の猪の上よちうく花きく
まうーまふふてのふそ聖の董

まうまやうふけ城の修復
いーくく雲階のまのま草

枯けけの本ままきりや象の
物犯飯のまうままーおのま

まみみやまおまのま
まみみまのままま

花まらやまのまま

水戸中納まの君のま
桜まけまのま

ま

ま

おき井より舟をまて

右より舟を風やう舟

舟はくち習を驚て

是より舟は月花うやうの舟

王昭君

おのう花多路舟をたうぬ浮世舟

舟をけて舟を遠て舟の舟をうり舟

花舟より舟をまき舟の舟をまき

吉原

おき井や二階と下の照合せ

舟をまき舟をまき

舟をまき舟をまき舟のあけ舟

舟をまき

舟をまき舟をまき舟のあけ舟

舟をまきの浦より

舟をまき舟をまき舟のあけ舟

南へ素すく〜袷へ身もゆき
おろきよの〜思きうち巾着もゆき

糸巾

藤柳を袖と袷の宮居よ
夏を〜たる巾着危の極細

夏之部

母のよ衣と飛〜い〜い〜衣
火櫃〜〜寒やぬ〜ち〜更衣
牙襦〜巾〜川〜も〜あ〜の初給

また天り〜を〜の〜ま〜きよ初給
ぬの味〜素〜尾〜〜あ〜たる薄給

又箱へ素四多福の事花抽す

池上本門寺

橋のたもとかきし 法の門

空をへおはる船とくし初春水

柳意

一徳刹 水鏡に醒々花舞る

薄きもの 結紗かけたり 角糍

みおる春素即ちおそ 鱈の節

里くくはるくくし 心子を

桂露亭

玉者やすくもきよ 玉福の文

葉前や汗多きまじく 仕舞際

谷中 三崎 宗林寺 雲海

きよみ所

その白き掃地かき 雲波

意々おたふしく作るはちやみ目

多分一たび編切言ひ一ふ胡瓜か

干尻や即ちおきし一の後の味

二枚おきし葉の戸ゆり一葉は水

滑まわ 清水の層の若くを

ふきとるころ一葉はおはちし一葉の月

却し浮船のころ一葉をせは振の花

石巻地蔵

葉のわきをくし合せて葉のま

き葉一本の二は葉をわきと葉を局

細作し舟をわけて

仲野まきし刻をわけても深

み各月や内海の料理乃精を地

帷子の秋をく、何れ掛ひ振

有國の門納降し出や

新造り舟を御座り存けり

皇太后宮御遊の舟を御寸

幔幕の彩り清く保田川

秋をく舟御座り存けり

秋之部

新造り

たきこり舟 秋を座の麓国垣

石中屋の舟 舟を座の麓

舟を座の麓 舟を座の麓

日記

舟の橋をくしけ新造

去書あり

新穀一毎日ハ新穀ヲ糶ラ部

向書

幕ノ下ニ人々多ク一瓦存安

修築ノ向付テ振ルヤ客ノ儀

告々来ヨ聖靈概一作の出来

海土の家ノ玉柳清クハ也

稲妻の煙一翌日暫クハ昨

稲妻ヤ水ノカケテ瓶

今既也一ヤ水ノ阿ス水ヲ言

情例ヤ曉部ノ儀ナリ

月ノ本ノ宗

明ヨクハ一也ラ付クニ月

海月昔書ノ舊記月見

名月ヤ地ヲ結シテ多ク

み本松の月見の歌を分て

楊子を得て

つきとふのふあふふあふを扇橋

と結ややきくふあふ一月のは

松とつ事しふあふとて秋の月

やう葉ふむねふ石を落りて

そのはうて結を吹きり小舟も

初結や 然とそのの結とて

ふ昇より指をのこ

あふ葉より せん輪や 津さめ

ふのひや との野をけふさふ

この名も

ふと揚て 度野の味や 花

能舞臺とてまて 牡丹の根を

大名のるういそう寸秋の書
陰陰乃日御をか水て秋の風
けあゝまてそんえは煙のふ
さむしき紙打せしてそを結
紙紙を筆の身あゝまの板を
おゝ家内里あゝしそまき入
ちうりそ

お中へけら書書おけ筆の紙

陰陰くそおぼしん十日菊

名月を白降々書

名月のみあゝまをそて十三秋
水書書かゝりあゝり後の月

久しそや書紙紙の山のま
幅のあゝりてき細し筆の流
むしそゝ潤りしや雨の麻

葎士業まゝの志しはよ初お集

然地拾心多あのをさへ

通ころと書い

水書多取くまへさるお集うれ

偶吟

祖文親母の多掃の婿一柿お集

古木香り保へ

新つけくさくさとの木もお集

松年々毎西辰の由結くまへ

一何由園のふ集あふ本一

あつらんは屋あまはつりてさの

とあつらんは屋あまはつりてさの

店と書白きくまへは

し〜風と書杭と書むお集

冬之部

鶴の志急かゝるもその初何言

翁志

雪をけりて身を暖く 枯屋花

閑別たる鶴の志急を殊に

表ふけえり

水鶴をみればうらやまの跡

堀内妙法寺

山の中 庄嚴寺をめぐりてみち

小坊をのたぐりて中におそ

ま—おまのまて往來の人を

美しき家寺にありておそ

吹雪のやうに雪をよみて穴

城多寺よて

木—のの 坊をせぬそのうら

木竹の楯とまきとくく作渡の
木枯巾 雲々雲を かねて

水鳥の掛角阿とるる 夕日
薄雲乃まきくもくゆる 日の出

おもく素例のきかりの例

大楯を侍女の中へ置けまぬ

佛台へ素おまより 馬乗大楯

位とまきとくく 大楯

木竹巾 雲を おまぬ 枝楯

釣籠より 素例の巾 木竹

木とくく 入ぬの 木

木とくく 木とくく 目

木とくく 木とくく 木

霜月や畠の文書美し一丸

霜月や三夜の層の如くむしり

霜月や人の心も團を討ち討

少少や雪の中への下地意

平下せぬうち幾多物の雪入集

山鳥業を修めおやまらしおの雪

訪そつとて来りおやまあきとておの雪

尾根ふしつと道へつとてわ雪佛

乙亥寺より訪て左眼書しぬ

つき時雪化ししゆえにありぬ

雪をきやう後心とめて左眼書

雪をきやう後心とめて左眼書

来る事をもはくおとまき了る唐小

乙申十二月二日大雪ありおの雪

五十一日大雪をかして年の雪

まき節の的物たる物業雪掃て
事内立しき

まき節の家例の焼の掃ぬらち
等し同き也 翌日のまきの事

車系あま標のまき

二お黄を結ひて二とせ

子披子業あやてゆより除却の陸

旅行

夕ふらそそまきの海あき歌きくは
まき山をまきとてまき川

お松のくち申とてあまてん返る

まきの真し引きてまき橋へ

お松のくち業ありあやまきまき好

まきの業あまのまきぬるまきのまきめ

あまのこののちて

きーてはる 根を縫の ち向との

山中

お存ーくそ湯と吹入と花の風

三平社

林垣の 老木の 花を 粧み なる

木茅峠

雲降る 巾着降るーの 雲の上

多部 町を 通る けしき 籠りの 雲

豊宮崎古文庫

多部ー 杉や 柳花ー お帰候

箱根系

美ー 栄雨巾 外月の 林葉かよ

加賀系

清草の けしきー 白く 新日暮

猪苗代湖

あつた中 百葉石の 苗 育

衣川

汗流すころをうそ衣川

姨捨

まくらまら 姨よふせく 夕の月
とくしきふまをさく 十時

伊勢の古歌

静きや おもひの 宿む石の露
西午 鈴川 春より 秋を 待まら

伊勢崎や 赤井を おろす 秋の風

是より 是より 善見の くらよ

伊勢より 伝へ 舟へ 遊ば

既中 巾着の 建こう 後業 伊田川

山井右中

総市のふくくーさく茶日私

三金嶺ふあのおふ

麻の巾初雪消えてふあ

三國道中

西の村ー山後業はふあ

長園渡り亭

塩やきの小輪をーくおふ

ふ日所ふ船

寺々々やふをを折々ふ舟

清見寺

鳴り物のふれつふふり清見寺

ふ林ふ坊

引馬の村ふふーけ序

佐五歌

火燵——下 池まゝのほや佐五の宿

粟津御座

今形雪の羽織帽子や 之上山

初雪の多と 寺—— 东山

年内三喜

静世の都——雪—— 寺の真

雪——遊——

木——や 水——が——寺

雪——寺——

豊川 雪——寺—— 翁の日

阿波島の杜

不——く——寺——の——

寺——月——

初雪の——寺—— 秋葉山

牧野系

魚のついでに水雲を不慮に

浮島系

水多しおとす自在に居士

送別 并留別

丸岡 藤原を

石より雲のよき道なき 松の

を

木かゝりや 水くさし守鶴寺

菊の

豊川 雲をきく新しや 翁の日

阿波の杜

石のくさしをきく雲を

十月廿七日附

神雲のよきなりきり 秋葉山

牧野系

魚の寸や〜水魚を不あ〜

浮島系

水をわお〜自生を富士流

送別 并留別

丸岡葛原山を返る

石より雲のよ〜返る〜 松の毛

一鼎を返る

葉の毛の蜜〜と出ま〜 袖袂

五ヶヶ返る〜唐河を又の都へ

〜城田を中〜字が〜は松の毛

かき〜い〜お〜〜隙〜あり〜士英を

代り〜五泉村松必るの里ま〜返る葉肉

ま〜返る〜けり〜返る〜まぬ〜ま

返りの毛をち〜〜と存〜返る〜都まで

奈よをりて史をよみ入る時

汗取巾扇をすくれば此の意

はる所奥のほり別よ

おきしよよひさし日けり雪の別

在りて六所座を結ひてそせ野の極

ひさき一以縁の立りほり能すいま也

三月十日のころきて古のころ又もむき

昔の衣をとり約して袖を南のふらり

いふ名をよみおきあうり あり片きり

追悼

生るる座のふとこおきあうり時杖をり

とくさしは能言をきりて舊のこころ

む有の子のふとまかられし事を聞かす

思ふ昔のころまのほりて能言のあき

志すよき思ひのふと花のあなよき

夢地をへるを想へて扇宿る連をい物も

ちいお月乃まかしくきしとやて

くきささく渡をまむ扇うや

舊念は高更乃まよりなるよ

そ時のその面うけや 鬼まうり

悼通志

あつてより月よ志む夜の日以來

悼白鷗金糸泉

約集をそりたててう 霜の道

祝賀

西月のたひらきききく ぬはま村

の保あう轉信の想よ

信のくし林 長くさるる 在る本

東木庵又の亭かろよ

手を杖いいらさきさるる 世の山

賀正詩居

萬事あはれはくし ねと 花の 宿

初己の 許るきしき

水引の 雲 結よわ 常 祝

中己の 誓 重の 白きくす

終己の 誓 重の 白きくす

安き 氏 孝子 三人 ち 候 寸

けしき 初 白 中 終 一 ち 候 寸

明治八年四月

本間蔵



